



コード(分野)	17902 (8.福祉・人権・国際理解)
メニュー名	ユニバーサル・ラン<スポーツ義足体験授業>
校名(学年)	日野町立必佐小学校 第6学年
講師・支援者等	株式会社 LIXIL
学習名	ともに生きる～自分たちでできることを考えよう～
教科等	総合的な学習の時間
実施日	令和5年6月21日(水)9:25～12:20[9:00 顔合わせ]

《授業の流れ》

テーマ「スポーツ義足体験を通じて、多様性に関する理解を深める」

1 「義足」についてイメージを明確にする。

- ① 義足は見たことはある？ あまりなさそう（パラリンピックで見た）
- ② 着け方はわかる？ はめる、接着剤、磁石、縛る、…
- ③ <パラリンピック 4×100mリレー銅メダル 大島 健吾選手より>
義足を外した時の足を想像して、足がどこまであると思う？ 膝、脛、足首
履いている靴下はなんの靴下だと思う？ ペット、机の脚、幼児

2 大島選手の試走を見て、義足の使い方を知る。

- ・義足が高くなる分、反対側の足を腰から高く上げる感じで歩く。
- ・腰が引けないように、前を見て前重心で歩く。



3 準備運動をして、義足体験をする。

- ・3班に分かれて、それぞれのマットの上で歩いたり、跳ねたりしてみる。
- ・左右両方とも体験する。

4 大島選手と走りの競走をする。

- ・体育館の縦を使い、スポーツ義足の大会選手に挑む。結果 大会選手が速い！

5 座学：「多様性」についてプレゼンテーション・ワークショップ

- ① 義足を使う人口

日本	約6万人	(2000人に1人)
アメリカ	約200万人	(155人に1人)
インド	約500万人	(240人に1人)
世界では…	約2000万人	が使用 (365人に1人)

② 「多様性」って何

1) 性別、年齢、障害の有無、国籍、宗教、文化、習慣、言語、肌の色など目に見えるものや見えないものがある。

2) 世界がもし100人なら2023... 男：女 = 49：51
その内、身体障害者に限れば 3/100

3) メガネのイメージ...300年前に誕生

・インテリ ・目が悪い（障害）→今は当たり前！！

◎ 「多様性」とは、「一人ひとりに、違いがあるということ」を知る。

ユニバーサル・ランは、思い込みのイメージを変容させて、心のバリアフリーに気づくことが目的で、物事を違う方向から考え、本当の優しさや思いやりを養ってほしい。また、SDGsについても理解を深める。

6 「義足」についての疑問点を、グループワークで考えてから質問タイム

- ・車の運転はどうやって？ A. 右か左によっても変わる。（足か手）
- ・陸上のほかのスポーツはどうやって？ A. 生活義足で可能。
- ・鉄棒なんかもできる？ A. できる。
- ・お風呂は？ A. 外して入る。ただ手すりは必要。
(ユニバーサルデザイン仕様のバス)

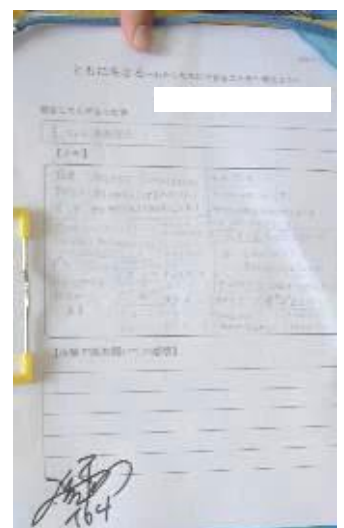
7 全員記念撮影（銅メダルも一緒に）



<感想等>

児童

- ・楽しくて、ワクワクした。
- ・とても、義足をつけて走っているとは思えないくらい速かった。
- ・義足をつけていても、車や自転車に乗れるのがすごいと思った。
- ・義足をつけて歩くのは怖かった。走ることもできなくて、義足をつけている陸上選手はすごいなと思った。
- ・もし私が義足を本当につけることになったら不安だと思う。
- ・大島選手がすごく速くてびっくりした。
- ・義足をつけている人とそうではない人で変わらないところもあった。
- ・一つでも工夫を加えることで同じように生活ができることが分かった。



学校



- ・大島選手や講師の皆様が児童に気さくに接して下さったことがありがたかった。実際に義足を目にすることや、義足を使っている方と関わることが初めての子ばかりで、大変貴重な経験になった。この1年間、様々な体験や出会いを通じて、「ともに生きる」をテーマに人権や福祉について学びを深めていきたい。そして、子どもたちが多様性の意味を、言葉ではなく実感として捉えられるようにしたい。

支援者・講師

- ・LIXIL は世界中の誰もが願う豊かで快適な住まいを実現するために、日々の暮らしの課題を解決する先進的なトイレ、お風呂、キッチンなどの水まわり製品と窓、ドア、インテリア、エクステリアなどの建材製品を開発、提供している。そして事業活動を通して地球規模の環境問題や社会問題の解決に向け、「LIXIL×SDGs NEXT STAGE」と称した取り組みを進めており、SDGs に貢献している。

今回の授業は、その一環として、「ユニバーサル社会」の実現のために、「モノのユニバーサルデザイン」だけでなく、自分とは違う誰かを思いやり、配慮できる「心のユニバーサルデザイン」を推進する取り組みのひとつでもある。この授業で子どもたちが、スポーツ義足を体験し、義足を付けて努力しているアスリートとの交流を通じて、異なる視点から社会を見つめなおす契機となれば幸いである。

